

『ないしょワンルーム　く世話焼き妹と過ごす休日く』

特典シナリオ台本

## 【登場人物】

### 住谷茉依（すみや・まい）

高校1年生。あなたの妹。

優しく世話焼き、ときには頑固な一面もある女の子。

なにかと几帳面な性格はちょっとだらしないあなたとは正反対。

一人暮らしのあなたを心配していて、ときどき実家から片道三時間ほどかけて様子を見にきてくれる。

あなたの生活におせっかい気味に口を挟む様子は『ちいさなお母さん』。

手先が器用で家事全般は得意。

ただ身長が低いため、高い所にあるものをとってもらうときには姉の手を借りる。

夢を追うあなたを応援している気持ちと、置いて行かれてしまう焦りを感じている今日この頃。

「茉依が高校を卒業したら一緒に暮らす」という約束が叶う日を心待ちにしている。

《年齢》 15歳 《身長》 149センチ

《バスト》 B

### あなた（姉）

茉依より背が高く大人っぽい容姿。地元に住た頃は優等生の擬態が上手く、家ではぐうたらするギャップがあった。外面が良いぶん、家で脱力する人間。

現在は看護の短大進学を期に上京し、専門的な職につくため日々忙しく過ごしている。

茉依は、「自分だけは姉の本当の姿を知っている」という優越感を味わっていた。なにかと姉と一緒に過ごす口実を探している。

姉がだらしないのは、妹に世話を焼かせる余地を作っているからではないか、と推察している

## 【あらすじ】

あなたは看護学校に通う大学3年生。

実家を離れた下宿での暮らしは、忙しい学業の影響でつい荒れ気味に。そんなあなたを心配して、ときどき妹が様子を見にきてくれる。

しっかり者で世話焼きな妹の茉依は、

あなたの外面はいいのに家ではだらしない性格をよく知っている。

2月末。

この土曜日にも茉依がやってきて、

散らかった部屋を片付けてくれたり、一緒にお散歩してくれたり、ご飯を作ってくれたり、甲斐甲斐しく面倒を見てくれる。

心配性ゆえに少々口うるさい茉依だけど、

大好きなあなたと一緒に過ごす時間を楽しんでいる。

ふたりが恋人同士であることは、

まだ誰も知らないふたりだけの秘密。

姉妹同士の恋人同士、

ふたりの密接で静かな、他愛ない一日に浸る音声作品。

【EP01：すやすや、はむはむ】

---

○あなたの部屋・ベッドの上（朝）

あなたはベッドで寝ている。

茉依がやってくる足音、外階段から近づいてくる。

合鍵で入室。

「（小声で）おじゃまします……」

入室後、空気を吸い込み、久しぶりの姉の匂いを楽しむ茉依。

深呼吸。

「（嬉しそうに）……うん」

おねえちゃんのおいだ、と確認して喜ぶ。  
ベッドへ忍び足で近づく茉依。

「ねー、おねえちゃん？」

「やっぱりまだ寝てた。」

「……ぜんぜん既読つかないわけだよ」

「おはよー？ 朝だよー。あさ。」

「おはようございまーす」

「……昨日、何時に寝たんだろう。遅かった？」

ベッドのすぐそばまで来て顔を覗き込む。

「……んゝ………？」

「おねえちゃん」

「……（短くため息。これからお世話ができる、嬉しい吐息）」

なかなか起きないあなたの傍らできばきと片付けを始める。

フロアリングに散らかる衣類などを拾い集め、ベッドから離れていく。

遠ざかる足音。

「んしょ、ん……、……」

「わーもう、あー……（改めて部屋を見渡す）  
またこんな散らかして……」

カーテンを開く。

「あ。洗濯物干しっぱなしだ」

「スカート脱ぎっぱなし。皺になっちゃう。  
あとでアイロンかけるよ」

「ねー、シャツも脱ぎっぱなし。  
てか引き出し開けっ放し。  
ドライヤー出しっぱなし……」

「おねえちゃん。この部屋、泥棒が入ったみたいになってるよー。  
だらしなあ」

洗面所へ向かう足音。洗面所の洗濯機の蓋を開ける茉依。

「この洗濯物は……？」

使用済みかを確認しつつ選別していく茉依。

「洗っちゃっていいやつか。じゃあこれも……」

衣類を入れる。

「……待って、このタオルいつから……  
(匂いを嗅ぐ) んひっ。だめだ、交換」

洗面所のタオルも洗濯機へ。

洗濯機を操作して、ちよっと考える。

「ねー、おねーちゃん？」

今日いい天気だよ、適度に風もあるし」

「今からなら、洗濯物、夜までに乾くと思うんだけど……  
その部屋着もついでに洗っちゃおうよ」

「……ねー、起きてるでしょ？」

近づく足音。ベッドまでやってくる茉依。

あなたの狸寝入りをとくに見破っている。

「ほら、ねえ、寝たふりしてるでしょ。  
もう分かってる」

「……まだ起きたくないの？」

「（寝顔を確認）……寝てる？ ガチのやつ？  
寝てるんですか。そうですか」

「……ほんとかな？ もしもーし？」

「ほんとに寝てるんなら、  
ちゅーしちやおっかな……」

あなたのほっぺたに唇を重ねる茉依。

かぶりつくような、おふぎけの触れ合い。

「……はむ。……ふふふっ」

耳たぶを軽く噛む。

たまらず笑ったあなたにつられ、茉依もくすくす笑う。

「ふふふふ……はむはむ……ふふふっ」

「ほらー、起きてんじゃん」

「おねえちゃん、おはよ。

昨日遅かったの？」

「ん。ゆっくり眠れたならよかった」

「その部屋着もさ、どうせ結構洗ってないでしょ？  
ねーそうでしょ」

「ほら、脱いで。一緒に洗っちゃうから」

脱がせようとする茉依に抗ってみるあなた。  
ふざけあう雰囲気で笑うふたり。

「ふふっ」

「えー？　ねえ『えっち』じゃないでしょ。親切なんですけど？」



「お洗濯するって言ってるんです。  
脱いでください」

しぶしぶ服を脱ぎ、着替えを始めるあなた。

「……よろしい。洗濯機、まわすね」

遠ざかる足音。

「早くしないと、風邪引いちゃうよ。  
ほらがんばって、お姉ちゃん」

洗濯機のボタンを操作する。

洗濯機回り始める音。

【EP02：さむさむ。せっせと。】

---

○あなたの部屋

○洗面所

時間経過。

洗濯が終わった電子音。

「できたできた」

洗面所にやってくる茉依の足音。

「……んしょ……、っと」

洗濯機の蓋を開け、洗濯ものを籠にうつす茉依。

「よし、やりますよー」

茉依についていくあなた。

ベランダの窓を開けると町の環境音。

「うわさっむ……」

高架線のそばで、電車の走行音が響く。

「うーさむさむ……  
んしょっと……」

「ふふ、ねーやばい、山じゃんこれ。  
ハンガー足りるかなあ」

「前も聞いたけど、ここほんとに外に干していいの？  
排ガスとか大丈夫？」

「まいつか……」

ふたりで洗濯物を干し始める。

「あ、お姉ちゃんは洗濯物広げる係ね。  
わたしは干す係するから」

濡れた洗濯物を広げる音。  
ぱんぱんとはたいて広げる。

「ん、ありがとー。その調子で続けて」

「っしょ……ん……っと。よし。  
……ん……」

洗濯物を受け取る茉依。

「……はい。ありがと」

ふたりで協力して洗濯物を干す物音。

「……ん（洗濯物を受け取る）、しょっと……（干す）……」

「あ。（嬉しい吐息）  
これまだ着てるんだ」

「このシャツ、うちでも着てたやつ。  
懐かしい」

洗濯物を干す。

「……うん、いいかんじ」

「空気乾燥してるし、きつとすぐ乾くね。  
天気よくてよかった」

「あ。だめだめ、これはこっち。  
室内干し。ね？」

下着を選び分ける茉依。引き続き洗濯物を干す。

「……んしょ。……つと。  
……ん。……つしょと」

「……………んん。」

ん…………もうちょっとこっち……、  
……………うん」

「できた、っと」

風が吹く。

洗濯物から柔軟剤の香りが漂ってきて、ふと笑う茉依。

「いいにおい。うちのと同じ柔軟剤」

「……………変わらないね、おねえちゃん」

窓を閉め、カーテンを閉じる。

「あー、身体冷えた。

今日天気いいけどさむいよー。  
ううう、さむ……………えいっ」

姉の懷にすりつく茉依。

「はあ……………。おねえちゃん、温かい」

「ぎゅー……………ん……………」

離したくないけど、まだやることがあるので切り替える茉依。

「ふー。よし」

「じゃあ次。畳みまーす」

「あ、いいよ。私に任せて。」

おねえちゃんはおかけの準備あるでしょ？」

化粧ポーチを開き、テーブルに化粧品を取り出す。

ベッドの上で洗濯物を畳む茉依。

あなたを手伝うことができて誇らしい。

せつせと畳みつつ、姉が化粧をする様子を見ている。

「……おねえちゃんていくつのときから化粧覚えたの？」

おかーさんには教わってないでしょ」

「高校のときには、ちょっとしてたじゃん。

安いやつかもしれないけど」

「へー、先輩に？」

私は、先輩からそういうの教わったことないなあ」

「だから、自分でちよつとずつ試してるよ」

「え？ べつに早いことないよー、

お姉ちゃんも高校のとき化粧してたんでしょ」

「なにー？ 教えてくれるの？ いいよ別に、自分で覚えるし……」

「ん——」

「（小声でつぶやく）おねえちゃんて人にも教えるの上手だった印象がないんだよねあ……」

「その気持ちだけでもらっておく。ありがとう」

洗濯物を畳む茉依。嬉しそうに歌っぽくお願いします。

「……それで、それで、すそ。」

「それで……すそ……よしっ」

「うん。折り紙みたいで楽しいでしょ？」

姉に褒められて嬉しい茉依。

「（嬉しそうに少し笑いながら）器用じゃないよ、誰にでもできるよこんなの」

茉依、照れ隠しでちょっと皮肉を言う。

「……おねえちゃん、知ってた？  
服って畳んで引き出しにしまうと部屋がきれいになるんだよ」

「はい。この機会に覚えておいてください。ふふふ」

ずばらなあなたに小言を言う茉依は、それさえも楽しそう。

「こっちはアイロン、あとで。

これは、ハンガー掛けてっと……」

茉依、ベッドを降りて、クローゼットにハンガーをかける。  
またベッドに戻る。

「……んよしっ……ん……のばして、  
のばして……たーたーむ……」

「そで、そで、すそ……んっ」

「これ夏物じゃない？ まだ着てるの？  
……衣替えした？」

部屋を確認し、少し諦め気味に。

「この部屋に衣替えという概念はないですね……」

「冬物足りてる？  
一緒に買いに行こうよ」

「今日じゃなくていいよ。  
おこづかい溜めとくから、今度」

「次。約束、ね？」



「うん。約束。次ね。……へへ」

「……………（姉の化粧を見守る吐息。楽しい微笑混じり）」

服を畳みながら、

あなたが化粧をする様子を見ている茉依。

「ん？ んーん、見てないよ。

……見てました」

「お姉ちゃんが化粧するところ見るの、好きなんだ」

「そうそう、見てたよ前から。こっそり」

「だって、面白くて。変身してくかんじ？キラキラしてくかんじ」

「お姉ちゃんが美人になってくの、嬉しいし」

「あ。元がいいのは前提だよ？美人なお姉ちゃんがもっと美人になってるの」

「なんか……キリっとする。シャキット？」

「『シャキット』っていうと、なんか野菜っぽくない？」

「おうちのだら〜んとしたおねえちゃんも好きだけど、キラキラおねえちゃんも好きだし、私は」

「うん。（照れながら）好き……」

「……はい、この機会に覚えておいてください」

「……畳んだやつ、適当にしまうからね。

ん、だいたいわかる。

これ終わったら、お出かけね」

「今日、楽しみにしてたんだよ。ずっと」

「……お正月はうちで会えたけど。

ふたりでゆっくりはできてないから。でしょ？」

「……うん。出かけよっか」

部屋を歩き回り、施錠確認。

「戸締り確認、よしっ」

クローゼットからコートを取り、あなたに渡す。

「上着はこれ？　これだけで寒くない？  
はい、袖通してー」

上着をあなたに着せる茉依

「あ、いいにおい。香水？  
でもつけてなかったよね？」

「パウダーのにおい？　へー」

あなたからも茉依の匂いに気付いて嗅いでみる。

「なにになに？　ちょっとくすぐったくて笑う」

「私は何もつけてないけど？  
いい匂いなんかしません」

「あー、嗅がないでー。  
ねー、コート着づらいから離れてー」

茉依も上着を着る。マフラーも巻く。

「あー、髪かな？　ヘアオイルとか……」

「うん。最近使い始めたやつ。  
それかも」

「今日持ってきたから、  
夜お風呂上がりにつけてあげるね」

「同じ匂い……うれしいかも」

ふたりの足音、玄関へ。  
ドアを開ける。

「じゃ……行ってきます。  
行ってらっしゃい。はい」

「……（やりとりがおかしくなって笑う）へんなの」

ドアが閉じる。

【EP03：とくとく、ぱんぱん】

---

大きな池のある公園に散歩にきたあなたと茉依。

中途半端な時間で、混雑はほどほど。

そよぐ木々、低い滝を流れる水音のなか、ふたりの靴音が響く。

○公園

「最近ー、うーん、最近はねえ」

「冬休みが終わって、

三学期始まって……とくには」

「来月はもう春休みだし、

三学期って印象薄いよね」

「（笑う）……うん、影薄いの」

「一学期はみんなはじめましてだし、

二学期はイベントが多いでしょ？

でも三学期ってなんか惰性じゃない？」

他愛ない近況報告。

大好きなお姉ちゃんと一緒にいるだけで口角が上がってしまう茉依は、些細なことを話してるだけでも嬉しい。

「おねえちゃんは？」

「最近は。相変わらず忙しそうだけど」

「そっか。忙しいよね。」

「……私の連絡、迷惑じゃない？」

「おねえちゃんあんまりスルーしないじゃん。」

「すぐ既読つけて、なにか返してくれてるから」

「あと新しいスタンプいっぱい買ってるでしょ。  
浪費家だあ……」

「べつにいいじゃん、」

「同じのずっと使い回しても」

「……え、そういうところも見栄っ張りなの？」

「スタンプの流行り廃りとか考えたことない。  
気に入ったやつずっと使ってればよくない？」

「ていうか私が相手ならべつにいいじゃん、  
へんな見栄はらなくても」

「だいじょうぶだよ。  
お姉ちゃんのことぜんぶ知ってるし。  
今更かっこつけなくてもいいって」

「うん、かっこいいよ。おねえちゃんはいつもかっこいい」

「（笑いながら。本心から尊敬してるが照れ隠し）嘘じゃないよー」

「ていうか、

かっこつけるのも今更手遅れじゃない？」

「だって、……

（小声で呟く）私さっきおねえちゃんのぱんつ畳んだんですけど」

「ふふふ、いいよー、そのままで。

いつもどおりのおねえちゃんでもいいよ。

いーのっ」

「……（会話の余韻でちょっと微笑みまじりの吐息）」

橋を渡るふたり。

木製の橋の上を歩く足音。

すぐそばで水が流れる音。

「あー。最近ね、夢見たよ」

「うん。お姉ちゃんが出てきた」

「（ちよっと思いき出し笑い）……何してたと思う？」

「ヒントはねー……

お姉ちゃんは、私と一緒に」

「正解は、今日みたいに散歩してた。  
一緒に」

「この公園、前も来たじゃん。  
あの時の夢かも。それか、予知夢？」

「うん、でもね、  
夢の中のお姉ちゃんは部屋着なの」

「だるだるのスウェットで、つつかけ履いて、  
髪の毛はヘアバンつけたままね」

「そうだよ、すっぴんすっぴん。超油断してた」

「だいじょーぶ。夢の中に、他の人は出てこなかった」

「そう、公園にふたりきりで散歩してた。  
だから、お姉ちゃんもオフモードだったんでしょ」

「夢のなかくらい、気を抜いても良いよ。ねえ？」

「え、おねえちゃんも？  
夢のなかの私、何してた？」

「うーん。ぜんぜんわかんない」



「なにそれ。踊らないよ。え？　いつ踊ってた？  
それほんとに私？」

「えー？　えゝ。五歳の頃なんてわかんない。  
覚えてないよ」

当時の妹をかわいがるあなたの言葉に  
少し嫉妬心を覚える茉依。

「……そりゃ五歳の頃なら誰でもかわいいよ……  
むうー」

「それお姉ちゃんの影響だよぜったい。  
自分から踊る子じゃなかったよ。  
お姉ちゃんが教えたんでしょ」

「そうだよ。」

私は、お姉ちゃんの真似っ子する子だったから」

「もう、全然真似できなくなっちゃったけどさ。  
昔は、だよ」

「今はぜんぜん、おねえちゃんみたいになりたいって思っていない。  
なれるって思えないから」

「私が真似するとお姉ちゃん変わってっちゃうし」

「髪伸ばしたら、おねえちゃんは髪切っちゃうし」

「おねえちゃん東京の大学行っちゃうし」

「私も東京の高校にすればよかった。  
せっかくお姉ちゃんと同じ高校選んだのに……」

「だって、『あの』おねえちゃんの妹だってバレると、  
それだけでヘンな期待されるよ。プレッシャー……」

「まあ、いいけど。友達もできたから」

「そ。女の子だよー。」

ほら前に話した、うんそう。……普通。  
えー、言える感じではないかな……まだね」

「まあ、べつに言わなくていいからね。うん」

散歩を続ける二人。

橋を渡り切る。

池の外縁を歩く。

「……夢には……」

「五歳じゃない私も出てくる？ 今の私」

「……『あなたの恋人の茉依』も出てくる？」

「……じゃあ、そのうち見て。  
なんでもいいよ、登場させて。  
今日のことでもいいからさ」

「私。もう五歳の妹じゃないからね」

「……分かっているなら、よろしいです。はい」

「……お姉ちゃんの話聞いてさ、  
ちっちゃいままの私の方がよかったのかな？  
とか思ったりしたけどさ」

「でも、おねえちゃんの夢に出られるなら、  
まあ五歳のままでもいいかな」

「……景色きれい。不思議。  
池の向こうにビル見える。都会くってかんじ」

茉依のスマホのシャッター音。  
スマホで景色を撮る茉依。

「……」

あなたのスマホのシャッター音。  
景色をとる茉依を撮るあなた。

「え？ 今撮った？  
私？ なんで」

「全然油断してたもん。」

逆光だし……なら、一緒に撮ろうよ」

「はい。ほら、こっち」

肩を寄せ合うふたり。

「撮ーるーよ」

茉依のスマホのシャッター音。

「（笑い声）」

茉依のスマホのシャッター音。

「お母さんにも見せとく。元気だったって」

「うん、ふつうふつう。ぜんぜん気づかない。」

『あんたたち仲いいわねー』って言ってるよいつも」

「私は、ずっと内緒でもいいよ。ずっと」

「わたしとお姉ちゃんだけが知ってればいいじゃん。ね」

「……うん。ふたりだけの内緒。うん」

「……（小さく笑い声）」

大好きな姉と過ごす嬉しい時間を噛みしめる茉依。  
ふたり、散歩を続ける。

【EP04：なでなで、あつあつ、ふーふー】

---

○あなたの家

夕飯を作る茉依。

フライパンでグラタンの具を煮ている。

あなたのリクエストに応じたメニュー。

茉依の調理を後ろから見守っているあなた。

「……ん」

火を止め、器に具を移す。

「だいじょーぶ、任せて。もうできちゃうし」

「おねえちゃんは、座ってゆっくりしてて。スマホでも見せて」

グラタンをオーブンレンジに入れようとする茉依。

「……っと、おねえちゃんあれある？  
あれ」

「天板。角皿。……ほら、オーブン用の」

「レンジ買った時ついてきたでしょ。……戸棚？」

戸棚を開けようとする茉依。しかし手を伸ばすが届かない。

「あった！ ん……、ん……」

「踏み台ある？ 届かない……」

「お姉ちゃん、届く？ あれ取って」

背の低い茉依にかわって、戸棚を開けるあなた。  
お皿の天井を取り、台所に置く。

「ありがとう」

「これにグラタン載せて、オーブンで焼くの。  
オーブンのときに使うの」

「……おねえちゃんひとりのとき使わないか。  
うん、取っておいてください」

「チーズどのくらいかける？  
……無限ナシです。無限にはないです。  
はい、可能な範囲でめいっぱいね」

「じゃ、いきまーす。……もっと？ ……もっと？」

グラタンの上にチーズをいっぱいかけながら笑う茉依。

「わー、こんなに贅沢に使っていいの……？  
使っちゃお……せっかくだし……」

「よし、これでおっけー」

オーブンにグラタンを入れ、ボタン操作。加熱が始まる。

「じゃ、ちょっと休憩……の前に、キッチンの片付け……」

「お姉ちゃんが？ できる？ だいじょうぶ？」

片付けを申し出るあなたを、幼子をあやすように心配する茉依。

「じゃあ、一緒にやろっか」

「包丁は洗っておくね。」

フライパンも今のうちがいいし……ちゃちゃっと」

「……♪（嬉しそうな鼻歌）」

手短に調理器具を洗う。

「……いったん終わりっ。ほらっ。手冷たいでしょー」



水道水で冷えた手をあなたの頬にあてる。

「えいっ」

あなたの反応が楽しくて笑う茉依。

「お姉ちゃんのほった、あったかいし柔らかい。  
もちもち、すべすべ」

「……（劳われて、嬉しくて笑う）ありがとう。  
うん。ちょっとゆっくりする」

「あ。その前に、アイロンかけちゃお」

アイロンの準備をする茉依。

アイロン台を出し、アイロンを片手に室内を何歩か歩きコンセントを探す。

「……コンセント混みあってるなあ」

「そっちある？　ありがとう」

「じゃあ、ちょっと今からおねえちゃんのしわしわスカートを復活させます」

「……♪（嬉しそうな鼻歌）」

アイロンの音。

楽しそうにアイロンをかける茉依。

「……しわ、しわ……のび、のび……」

「……んふふ。けっこうすき。アイロン楽しい」

「でも、自分の服はここまでシワシワにならないから」

「おねえちゃんのは大物。腕が鳴る」

「……しわ、しわ……のび、のび……」

「よし。反対側」

「……あー。アイロンかけたところ、あったかい……」

「……しわ、しわ……のび、のび……」

「かわいいスカート。大学これで？  
めっちゃかわいいじゃん」

「私はむりだよ、こんなロングスカート。  
裾が地面についちゃうの。ほんと」

「おねえちゃんみたいに背が高ければね……」

「おねえちゃん、背伸びたの中学からでしょ？  
私、これから伸びるかなあ」

「まあ……今から伸びてもおねえちゃんは越せないから、安心して」

「……ん、ん……っと……っしょ……」

アイロンをかける。

「……ん」

「よしっと。ほかにもなにかありますか？  
今のうちに。シャツとか、ワンピースとか」

アイロンを続けようとする茉依を、あなたは誘う。

「今一緒にやっちゃいたいけどな。……まあいいか」

「じゃあ、おねえちゃんとのんびりタイム。はい」

アイロンの電源を落とし、あなたのもとへ。  
ソファに並んで座る。

「……はい。今日は、おねえちゃんのためにいっぱい働いたのだから……褒めてください。んっ」

頭を差し出す茉依。

あなたからの撫でられ待ちの姿勢。

「（撫でられて、幸せそうに吐息。笑う）……」

「おねえちゃんに、『いーこいーこ』されるの好き。  
なんかね……好き」

「はあ……」

「……おねえちゃん、あったかい」

「あー……なんかちょっと眠くなってくる  
……ぼかぼかする……」

「でも……だめだもうすぐ……グラタンが……」

「ふわぁ……」

あくびをして、うつらうつらする茉依。

窓の外、うつすらと聞こえる、高架を走る列車の音。

「（眠そうに）んん……」

オーブンレンジの通知音。  
目が覚める茉依。

「あ。できた」

キッチンに向かう足音。

オーブンレンジからグラタンを取り出す。

「あちち……あち……わあ……」

「いい匂い……みてみて、チーズすごい。  
これ熱いよ絶対」

トレーにお皿を載せて、リビングへ運んでいく。

「よし……どうぞっ。あ、その前に」

嬉しそうにスマホで撮影するふたり。

「映（ば）えるでしょ？」

「それじゃあ、いただきます」

「……ぜーったい熱いよ。おねえちゃん、ステイ」

「ふーふーして。しっかり冷まして」

「……まだ無理かな。もっともっと」

「あと、いきなりいっぱい口に入れるとぜったい火傷するから」

「様子見ながら、ちょっとずつにして」

「……だっておねえちゃんいつもそれで口火傷するじゃん。猫舌でしょ？」

「なのにグラタンとかドリアとか好きなの、謎すぎる」

「ふーふーできた？ もう大丈夫？  
ゆっくりだよ」

姉が火傷しないか見守る茉依。

「……よかった」

ほっとして笑う。

「おねえちゃん、おいしそうに食べてくれるから作り甲斐ある」

「見て、チーズすごい伸びてる。いいね」

「あ。ほら、油断油断。ふーふーして。  
それ、冷ましてるちゃんど？  
ほら、こうやって。……スプーン貸して」

「ふー、ふー。ふー。……ふーふー」

「ぱく……もぐ」

「あつ、おねえちゃんの食べちゃった。  
うそ……ごめんごめん、自分でもびっくり……」

「まあ……要領は分かったと思うので、お返しします」

「……（余韻で笑う）ねー、ほんとに今の、ミス、ほんと」

「流れで食べちゃったの。もー……」

「……ふーふー、あち、あち……ん……はふ……」

「おいし」

「………（咀嚼）」

「おいし？ よかった。また作るね」

「暖かくなる前にもう1回くらいは食べたいし」

「えー？ 夏には作らないよ。ぜったい暑いよ」

「うん……また、冬のあいだにね。もう1回くらいは」

「……（咀嚼）」

「おねえちゃん。ふーふーしな。

ふー、ふー。そう……よろしい」

「……んー、上出来……おいし……

私、天才かも」

「まあね。これでも一応、おねえちゃんの妹だから。ね？」

笑いあうふたり。

「……（ちょっと笑ったあと、咀嚼）」

食事を続ける。



【EP05：ちょきちょき、ちゃぷちゃぷ】

---

## ○お風呂場

ふたりは浴室で向かい合っている。

服を着たまま風呂椅子に座ったあなた。

茉依はあなたの前髪を切ろうとしている。

「本当はすきばさみとかあればいいんだけど  
……まあ前髪くらいならね」

「じゃ、目閉じてー」

あなたの前髪をブラシでとかす茉依。

「ほら、やっぱり長いよ。結構長い。  
気にならない？ 目悪くするよ」

「このくらいは切ろうかな……、えい」

前髪の先にハサミをいれる茉依。

「……………（真剣な吐息。集中）」

見られてることに気づき、少し笑いながら。

「なんで見るの？ 目、閉じててっば」

「そうそう。ん……」

ハサミの音。

「……………（作業に集中する吐息）」

「……………（思い出し笑い）」

「昔さ、すごい叱られたよね、おかーさん。  
おねえちゃんの髪、変に切っちゃって」

「ハサミを人に向けて危ないとかいってさ、  
私あるときすごい泣いたよね」

「でもさ、思い返すと、  
やっぱりおねえちゃんの髪の毛ひどいことになってたじゃん」

「でも、おねえちゃんはずーっとニコニコしてた」

「……………ほら、動いちゃだめ」

「ほんととちゃんと美容室に行って切ってほしいけど、  
忙しいんだよ」

「だから、今日は特別。お姉ちゃん限定、バーバー『茉依』、開業です」

「そして、もうすぐ閉店……」

「ん……ちょっとまだ。……もう少し」

ハサミの音。整える作業。

「んー、……………」

「……………（作業に集中する吐息）」

「おねえちゃんの前髪だから……、ヘンテコにはしたくないもんね……」

「っと……こんなかんじかな？」

「私が凝り性なんじゃないって、おねえちゃんがテキトーなんですよ。これくらい普通だもん」

「ん……目つむって」

顔についた毛をコットンで払う。

「ん……ん……。うん。毛もだいたい払えたよ。顔にはついてない。でも、あとでしっかり髪洗って」

「はい、こんなかんじで……」

まあ、素人の腕なので大目に見てください」

「あつ。待って、ちょっと待って、さいご、しあげ」

「……ちゅ」

あなたの唇に軽くキスをする茉依。

「ほら、飴玉。もらえるでしょ？  
美容室の帰りとかにたまに」

「それ的なやつです」

「……………（照れ臭い吐息）」

恥ずかしくなってきた茉依。照れ隠しで切り替える。

「……はい。お風呂入ろう」

服を脱ぐふたり。

「うー、さむいさむい……はいろはいろ」

お風呂の蓋を外し、ふたりで一緒に入る。水音。

「ふふふふっ。

せま……お湯半分くらいになっちゃったかもよ」

「……（笑う）」

「へんだよ。体育座りでお風呂入らないもん。いつも」

「なんか……おねえちゃんの顔近いし。よく見える。  
前髪も切ったし」

「ちっちゃいとき以来じゃない？  
こんなふうに、いっしょに入るの」

小さく笑い合う。

「……だれにも言わないって。おかーさんにも言えない」

「ないしょでしょ。こんなこと」

「……大丈夫、あったかいよ」

「おねえちゃんが髪洗ってるときに肩まで浸かるから、だいじょぶ」

「え？ えー？ こっち向き？」

あなたの提案で姿勢を変える茉依。

身動きに伴う水音。

あなたの胸に背を預ける格好。

「……なんか……逆に恥ずかしい……」

「顔が見えないし……」

「でも……あったかい」

「あったかいな……」

「……（嬉しい苦笑）」

「………（落ち着いた吐息）」

「ぎゅーってされてるの、うれしい」

「……ちょっと恥ずかしい」

「でもうれしい」

「ふふ」

「……ねえなんか喋って？」

「なんか恥ずかしくなる……」

「……でも、いいか。たまには」

「……（しみじみ嬉しそうな吐息）」

「はあ、いい湯だなあ……」

「……（リラックスした吐息）」

「ずーっとこうしていたいなあ……」

ゆっくり浸かるふたり。

【EP06：すやすや、すうすう】

---

○あなたの部屋／ベッド

先にベッドに入ったあなた。

茉依も寝る準備を済ませてやってくる。

近づいてくる足音。ベッドに辿り着く。

「これ、おねえちゃんが寝るとき着てるやつ？」

「なんか匂いがした。おねえちゃんの」

「いーの。これがいい」

「じゃあ、おやすみなさい」

ベッドにもぐりこんでくる茉依。

「……もうぼかぼかだ」

「あ。エアコンつけたまま？  
加湿器も？ はーい」

「暑くなったら言う。たぶんへいき」



「……（寝心地のよい姿勢を探る。吐息）」

「……ん……」

お泊りが嬉しくて、浮かれている茉依。

「……眠れないね、まだ」

「私は、いつもはもっと早く寝るかな。  
おねえちゃんは？」

「えー、夜更かしさんだ。忙しいんだなあ……」

「今日……ありがとね。時間作ってくれて」

「……嬉しかった」

窓の外の物音にちよつと耳を傾ける茉依。

「……なんか、東京って夜もにぎやか。楽しいね」

「うちだとき、耳鳴りするの。静かすぎて。夜とか」

「ほんとだよー。おねえちゃん、なったことない？  
私の部屋だけかなあ……」

「こんど確かめてみて」

「まあ、音がするときもあるけど……  
ウシガエル鳴いてたりね。夏とか」

「どこにいるんだろうね？  
たまにしか見ないけどね」

「鳴き声はあんなにするのにねー」

「……（吐息だけで笑う）」

「おねえちゃんがいる夜、楽しい」

「寝るときまで一緒なの、しあわせ。  
早く一緒に暮らしたいなー」

「待ち遠しいよ。……さみしいもん」

願望を呟く茉依。

今まではしっかり者の『ちいさなお母さん』ぶりを見せていたが、  
ここでもっと素直に妹らしく、恋人っぽく甘えた雰囲気。

「約束。あと2年。卒業したら、一緒に暮らす」

「ね。そしたら、毎日こんなかんじ？  
……ってわけにはいかないのも分かってるけど」

「でも、一緒に寝るのは嬉しい。楽しみ」

「いいよね。いいかんじ。」

「……私とおねえちゃん。姉妹同士、恋人同士。気にすること、なにもなくなってさ」

「自由なかんじで、毎日いっしょ。いいなあ」

「……わかってるよー。あと2年、ね。うん。  
東京の大学……がんばる、私も」

「まあ……お姉ちゃんの妹ですから？  
(笑って) がんばりまーす」

「……(笑いを引きずる)」

「……(一旦落ち着く吐息)」

「……おねえちゃんてほんとにさ、ほんとにほんとでできるよね？」

「家のこととかさ。」

料理だって、やらないだけで、やれば絶対うまいでしょ？  
家庭科だって5だったもんね？」

「面倒くさいっていうのは、あるかもだけど……」

「ほんとにダメなひとつで、化粧落とさず寝ちやったりするじゃん。今のところ、そういうの見たことないし」

「なんかちゃんと清潔感は維持してだらだらしてるでしょ。冷蔵庫のなかも綺麗だった。

まあ、あんまり入ってないけど」

「やばいひとは、ゴミ箱のなかのカップ麺のゴミがさ……やめようかこの話は」

「えー？

……いいよ、おねえちゃんは今まで通りで」

「おうちの中だけの、しっかりしてない、ふにゃふにゃのお姉ちゃんは、私だけのないしょのお姉ちゃんだからね」

「誰も知らないおねえちゃんの裏側だもん」

「……えへへ」

「ううん。おねえちゃん、優しいなあって」

「そうやってさ、ちょっとだらしないふうにして、私に世話を焼く隙を作ってくれてるんじゃない？」

「そしたら私が喜ぶから。

私が、おねえちゃんのお世話するの、好きだから」

「おねえちゃんのそばに、私の居場所を作ってくれてるんですよ」

「考えすぎ？」

でも、いいの。ありがとう、おねえちゃん」

「だーいすき」

「……（幸せそうな吐息）」

茉依からほっぺにキス。

「……ちゅっ」

唇にキス。

「ん……」

またほっぺにキス。

「ちゅ。ん……（嬉しい、照れくさい笑い声、静かに）」

「……喋ってたらなんか寝れなくなっちゃったかも」

「でも寝ないと……おばけ出ちゃうからね？」

覚えてるかな？と試すような口調の茉依。

「あの絵本。覚えてる？」

「眠れない夜、おねえちゃんが読んでくれた。

まだ二段ベッドの頃ね。懐かしいー」

「このあいだ図書館で見つけてさ……（続きを話す前に、思い出し笑い）」

「自分で読んでみたら、内容全然違うんだもん」

「お姉ちゃん、あの頃、作り話してたんだね。

わたしを寝かしつけるために」

「今思えば、お姉ちゃんの話と、絵本のページ数、全然あってないもん……」

「（笑いつつ）わたしが寝ないと、おねえちゃんが食べられちゃうからね。お化けに」

「お姉ちゃんが食べられちゃうのは悲しい

……いいこの茉依は、もう寝ます」

「ふふ。……またあした……」

「……………（次第に入眠）」

「すう……すう……、ん……」

「……すう……すう……」

茉依の寝息が続く。

## 【EPILOGUE：すやすや、もうすこし】

---

### ○あなたの部屋／ベッド

窓の外から微かに環境音。電車の音。  
室内ではまだ眠っている二人。寝息も静か。

「……………（寝息）」

携帯のバイブレーションが小さく響く。  
枕の下から取り出して、アラームを切る。

「ん……………」

身じろぎする茉依とあなた。  
寝返りをうって、向かい合う。

「……、んー……（あくび）」

「……おはよう、おねえちゃん……」

目が覚めたらすぐそばに好きな人がいる。  
幸福感の笑いがこみあげて、くすくす笑う。

「ふふっ」



甘えて更にすり寄る茉依。

「……………んー……………」

「まだねむい……………んー……………もうちょっと……………」

「……………ん……………ん。ちゅ……………」

「んー？」

（笑いながら）おはようのちゅー……………？  
絵本みたい……………」

「余計に眠くなったかも……………ぽかぽかしてて……………  
ん……………やわらかくて……………すき……………」

布団をかぶりなおす茉依。  
姉に抱き着いて二度寝。

「ね。もうちょっとだけ……………」

「……………（安心しきった深い呼吸）」

「……………すー、すー……………」

「……………（寝息）」